

Title	限界効用理論の歴史におけるWieserの自然価値理論の意義について
Sub Title	On the role of Wieser's theory of natural value played in the history of marginal utility theory
Author	川俣, 雅弘
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.2 (1989. 7) ,p.275(87)- 296(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19890701-0087
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890701-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

限界効用理論の歴史における Wieser の自然価値理論の意義について*

川 俣 雅 弘

1 序

Walras[39]やPareto[25]の完全競争市場の一般均衡理論の流れを汲む理論、たとえばDebreu[5]の理論においては、財の価値は完全競争市場において交換比率として決定される均衡価格として定義されている。しかし、限界効用理論の歴史においても価格概念とは別に財の評価としての価値概念が存在する。実際、Debreu ([5], 第6章)の理論において、最適な経済状態において決定される価格体系はある種の社会的厚生関数を最大化するように決定される財の評価としての価値体系であり(Lange [18]; Negishi [23]), 交換比率としての完全競争価格とは異なる概念である。これらの意味での価値および価格の概念は、厚生経済学の基本定理に基づいて同一視することができるため、従来明確に区別されなかった。しかし、限界効用理論の歴史においては、価値と価格とを区別し価値の概念の特徴について研究してきた理論の流れが存在する。それはAustria学派によって構成された価値理論で、Menger [22]の価値理論に基づいてWieser [40]によって一般的な価値の理論が形成された。⁽¹⁾

最も素朴な限界効用理論はGaliani ([8], 第1編第2章)によって構成された。かれは追加的効用逓減の法則に基づいて、財の価値は追加的効用によって測られる財の評価であることを指摘したが、価値と価格とを同一視していた(川俣[17])。Galianiの価値理論を受け継いでTurgot [33]およびCondillac ([4], 第1章; 第2章)は次のように主張している。すなわち、価値は個人経済の均衡で決定される財の評価であり、価格は2人以上の個人からなる交換経済で決定される財の交換比率であるから、価値と価格は異なる概念である。⁽²⁾

価値と価格が異なる概念であることを論証するためには、複数の個人からなる分配経済において

* 筆者は、東京大学の根岸隆教授、慶應義塾大学の福岡正夫教授、神谷傳造教授、大山道広教授、川又邦雄教授、伊藤幹夫助手、経済理論史研究会のメンバーの方々および匿名の審査員の先生から有益な御批評をいただいた。ここに感謝の意を表す。いうまでもなく、ありうべき誤りは筆者のみに帰せられるものである。

注(1) 根岸[24]はわれわれと同じ立場でWieserおよびかれ以後の理論の展開について議論しているが、われわれはWieserおよびかれ以前の理論の展開について検討し、根岸の研究を補足する。

財の評価として価値を定義し、このように定義された価値がその分配経済に対応する私有経済における財の交換比率としての価格と異なることを示さなければならない。Galiani, Turgot および Condillac は、個人経済の枠組みにおいて財の価値は追加的効用であることを指摘した。かれらの価値理論を受け継いで、Menger [22] は個人経済における効用最大化に基づく財の評価としての価値の理論として明確に定式化し、さらに Wieser [40] は Menger の価値概念を複数の個人からなる分配経済における財の評価としての自然価値の理論に拡張した。

本稿では、Galiani, Turgot, Condillac らの素朴な効用理論と Menger および Wieser の価値理論の構造を検討することにより、Menger の個人的価値の理論が素朴な効用理論の拡張であること、Wieser の自然価値理論が Menger の個人的価値の理論の拡張であること、したがって、Galiani, Turgot, Condillac, Menger そして Wieser によって形成された、市場経済とは独立な、財の評価としての価値の理論の流れが存在することを示す。

2 素朴な効用理論

ヨーロッパ大陸の経済理論の流れにおいては、財の価値を効用と稀少性によって特徴づけるいわゆる素朴な効用理論の流れがあった。Schumpeter は、素朴な効用理論の流れについて次のように述べている。

『諸国民の富』およびとくに Ricardo の『原理』の影響があらわれるまで影響力をもっていたのは、主観的あるいは効用理論であった。1776年以後においてもなお大陸においてはその理論が普及していたし、Galiani と J. B. Say の間には途切れのない発展の一本の線がある。Quesnay, Beccaria, Turgot, Verri, Condillac そしてその他のマイナーな権威たちが、その理論をますます堅固にするような貢献をした。かれらはすべて、価格および価格形成メカニズムを、かれらが経済活動の根本的目的であると考えていた欲望の満足に直接結びつけていた ([29], p. 302)。」

Menger 自身が指摘しているように ([22], p. 108, 注), Menger の価値理論は素朴な効用理論とくに Galiani, Turgot および Condillac の価値理論を受け継いでいる⁽³⁾。そこで、Menger の価値理論の意義を知るためにかれらの素朴な効用理論について考察する。ところで、われわれ(川俣[17])

注(2) Turgot [33] の価値理論については、Groenewegen [11] を参照されたい。また、Condillac は次のように述べている。

「価格という言葉と価値という言葉を混同したり、それらをどんな場合にも相互に無差別に使用してはならない。われわれがものを必要とする以上、そのものは価値をもつ。ものが価値をもつのはそれが必要とされるからであり、交換をするか否か以前の問題である。

反対に、われわれがあるものの価格を他のものと比較して評価するのはわれわれが交換する相手を必要とするからであるから、ものが価格をもつのは交換においてのみである。そして、その価格はわたしが述べたように、交換においてあるものの価値を他のものの価値と比較するときのそのものの価値に対する評価である ([4], pp. 30-31)。」

は、Galiani の価値理論においては『効用』は実際には限界効用を意味し、財の価値は個人が所有する資源を消費したときの『効用』の大きさによって決定されるから Galiani の価値理論は本質的に限界効用理論である、ということを示す。ここではさらに、Turgot および Condillac の価値理論について検討し、かれらの素朴な効用理論は本質的に限界効用理論であると考えられることを示す。

2-1 価値と『効用』

Galiani の価値理論と同じように、Turgot や Condillac の価値理論も個人経済に基づいている。Turgot は「価値という言葉の意味は他の人々と交渉をもたない孤立した人に対して生じる ([33], p. 85)」と考え、Condillac は個人と同一視できる「定着したばかりで、初めて収穫を取り入れ、孤立していて、耕作した田畑の生産物のみで生活を維持できる小さな未開民族 ([4], p. 3)」を想定している。また、個人は生活するために財を必要とする。個人は、それぞれの財に対する必要を満たすことにより得られるかれの『効用』およびかれが必要を満たすために消費できるそれぞれの財の資源によって特徴づけられる。いま、財は l 個あるとし、それらを指標 $h \in \{1, \dots, l\}$ によって表す。また、 h 財の『効用』を u_h 、資源を $\omega = (\omega_h) \in R^l$ によって表すと、素朴な効用理論における個人経済は $((u_h), \omega)$ によって表される。

個人の財に対する『効用』はかれがそれぞれの財の必要を満たすことによって得られる満足の大きさであり、財はその消費が少ないほど必要とされる。また、個人はかれの資源の制約のもとで財を消費し、より必要なものを消費しようとする。こうして、財の価値は個人がかれの資源をすべて消費したときのそれぞれの財に対する『効用』によって決まる。Turgot は、財の価値を次のように特徴づけている。

「未開人は小屋にもっていった子牛を殺そうとしたが、道でのろをみつける。かれはのろを殺し、よりおいしい肉を食べることを期待して子牛の代わりにのろを食べる。同じように、はじめはポケットを粟で一杯にしていた子供も、人がかれにくれたボンボンで一杯にするためにポケットを空にする。

したがって、価値の比較すなわち未開人や子供の判断における異なる品物の評価がある。し

注(3) 素朴な効用理論と Austria 学派の関連については Graziani [10] や Kauder [16] が指摘している。ただし、Kauder ([16], pp. 83-84) が指摘しているように、Menger ([22], p. 108, 注) はかれの先駆者としてイタリアやフランスの研究者の業績よりもドイツの研究者たとえば B. Hildebrand, K. G. A. Knies, E. Friedländer, A. Schäffle, L. v. Stein らの業績を高く評価している。したがって、Galiani, Turgot, Condillac らの理論と Menger の理論には直接的な結びつきはない。われわれは、Galiani らの理論と Menger の理論とが同一の理論の流れに属するというを、彼らの理論が理論の拡張(本稿, 注(9))という関係によって結びつけられることに基づいて主張している。かれらの理論の歴史的関係はより詳細な研究によって明らかになるであろう。

大陸の素朴な限界効用理論はまた、A. Walras [37] を介して L. Walras にも受け継がれている (Jaffé [13])。A. Walras [38] は、とくに Condillac と Say を高く評価している (Jaffé [13], p. 125)。

かし、これらの評価は何ら固定されたものではない。それらは、人の必要が変化するに応じて今にも変化する。未開人が空腹のときにはかれは最良の熊の毛皮よりも一口の獲物の肉をより重んじる。しかし、かれの空腹が満たされ、寒さを感じるならば、かれにとって貴重になるのは熊の毛皮である ([33], p. 85)。]

「同等に有用で優秀な2つのものの間では、再び見出だすことがとてもできないものがより貴重であるように思われるし、かれがそれを手に入れるのにより気を使い苦勞するであろうことはまったく明白である。この理由によって、水はその必要性と人が得る快樂の大きさにもかかわらず、水に潤っている地域においては貴重であるとはみなされないし、この生活手段は豊富で人は手もとに見出だせるから水を所有しようとは決してしない ([33], p. 86)。]

また、Condillac は財の価値を次のように特徴づけている。

「豊富なときには、人は欠乏の心配はないから必要をあまり感じない。反対の理由で、稀少なときまた欠乏のときには人はより必要を感じる。

ところで、ものの価値は必要に基づいているから、より大きな必要はものにより大きな価値を与え、より小さな必要はものにより小さな価値を与えるのは当然である。したがって、ものの価値は、稀少なときには上昇し、豊富なときには減少する。

豊富なときには価値は0になるまで減少しさえする。たとえば、人は何にも使用しないかぎりそのときにはまったく無用であるから、過剰は価値をもたない ([4], pp. 10-11)。」

「したがって、ものの価値がものの効用に基づいているならば、それらの価値が大きいか小さいかは、効用が同じであるならば、その稀少性あるいは豊富さに、あるいはむしろわれわれがそれらの稀少性および豊富さについてもつ見解に基づいている。

わたしが、効用が同じであるならばというのは、それらのものが同等に稀少であるか、同等に豊富であることを仮定するならば、それらの価値が高いか低いかは、それらのものをより有用であるあるいはあまり有用でないと判断するのに応じて判断することは十分理解されるからである ([4], pp. 13-14)。」

素朴な効用理論において用いられている『効用』という概念は曖昧さを残しているが⁽⁴⁾、財の価値を決定する『効用』あるいは必要については、次のように解釈することができるであろう。すなわち、財の『効用』あるいは必要は、消費の関数であり、財の消費が多いほど小さくなるから、消費の減少関数である。また、財の価値は財の資源をすべて消費したときの『効用』に等しい。すなわち、消費を $x=(x_n)\in R^l$ 、価値を $v=(v_n)\in R^l$ によって表すと、 $v_n^*=v_n(x_n^*)$ ただし dv_n/dx_n

注(4) A. Walras ([38], pp. 335-336) が Condillac の価値理論について指摘しているように、素朴な効用理論における『効用』という概念は二様に解釈できる曖昧な概念である。実際、「ものの価値がものの効用に基づいているならば、それらの価値が大きいか小さいかは、効用が同じであるならば、その稀少性あるいは豊富さに基づいている」というとき、価値を決定する『効用』は、財の消費における『効用』関数の値を意味するのに対し、「効用が同じである」という『効用』は、『効用』関数そのものの形状を意味している。素朴な効用理論が複数の解釈を許す理由の1つは、このように、本来区別すべき異なる概念を同一の概念によって表現していることにあるように思われる。

<0 であり、 $x_h^* = \omega_h$ である。

2-2 限界効用理論としての素朴な効用理論

このように、素朴な効用理論における『効用』は、消費の減少関数である。このことから、素朴な効用理論における『効用』は、資源の量によって制約される消費量を消費したときに、さらにある消費単位を追加的に消費して得られる追加的効用すなわち限界効用である、と考えられる。実際、効用関数も限界効用関数も消費の関数であるが、効用関数は消費の増加関数であり、限界効用関数は消費の減少関数である。ところが、素朴な効用理論における『効用』は消費の減少関数であるから、限界効用理論の立場から素朴な効用理論を整合的に解釈するためには『効用』は限界効用でなければならない。

こうして、素朴な効用理論における『効用』 $v_h(x_h)$ は、限界効用 $du_h(x_h)/dx_h$ であると考えられる。したがって、素朴な効用理論は個人経済 $((du_h/dx_h), \omega)$ およびこの個人経済の均衡

すべての $h \in \{1, \dots, l\}$ について、

$$(NUT \ \alpha) \quad v_h^* = du_h(x_h^*)/dx_h \quad \text{ただし} \quad d^2u_h/dx_h^2 < 0$$

$$(NUT \ \beta) \quad x_h^* = \omega_h$$

を満足する消費および価値 (x^*, v^*) によって記述される。

限界効用理論においては、効用は他の概念によって定義されない基本概念であり、限界効用は効用によって定義される派生概念である。ところが、素朴な効用理論においては、限界効用が基本概念であり、限界効用は微分によって効用から導出されるという考え方がなかったために、限界効用は限界という用語は用いられずに単に『効用』と表現されたと考えられる。

3 Menger の個人的価値の理論

Menger [22] の価値理論は個人的価値の理論および交換価値の理論からなり、個人的価値の理論は、主観的要因に基づく消費財価値の理論、客観的要因に基づく消費財価値の理論および高次財価値の理論からなっている。われわれが検討するのは客観的要因に基づく個人的消費財価値の理論⁽⁵⁾ ([22], pp. 95-114) である。Menger のこの理論は、個人が消費できる財の資源が与えられたときに、それらの財を消費してさまざまな必要を満足させることによって得られる必要満足を最大にしようとする個人の財の評価として価値を定義し、それがそれぞれの財の追加的⁽⁵⁾必要満足によって決定されることを明らかにしている。財の価値の性質についての Menger の思想は次のように特徴づけられる。

注(5) 本稿では Menger や Wieser の生産理論は取り扱わない。というのは、生産理論自体は価値概念と価格概念とを区別するために本質的ではないからである。Menger および Wieser の生産理論すなわち帰属理論については、Stigler ([31], 第6章, 第7章), Samuelson [26], Uzawa [34], 根岸 [24] を参照されたい。

「わたしが財の価値の本質を余すところなく特徴づけているならば、またわれわれにとって重要なものが最終的にはわれわれの必要の満足だけであり、すべての財の価値が単に経済財のこの重要性の移転であることが確かであるならば、われわれが日常生活において観察しようように、それぞれの財の価値の大きさの差異はこれらの財の利用に依存しているわれわれの必要満足の大きさの差異にのみ基づいているのである ([22], p. 37).」

3-1 Menger の個人経済

ここで考える Menger の経済は 1 人の個人からなる個人経済である。経済活動をする個人は、生活を維持するような消費の集合を表す消費集合 $X \in R^l$, 必要満足を飽和させるような消費の集合を表す飽和消費集合 $S \subset X$, 生活を維持するような消費 $x \in X$ から得られる必要満足を表す関数を表す必要満足関数 $s: X \rightarrow R$, 個人が利用可能な財の量を表す資源 ω によって特徴づけられる (Menger [22], 第 2 章)。したがって、Menger の個人経済は (X, S, s, ω) によって記述される。

個人にとって資源の量は所与であり、この個人は資源の制約のもとで必要満足を最大にするように行動する (Menger [22], 第 2 章)。個人が任意の財を消費して得られる満足は、さまざまな必要を満たすことによって得られる。いま、必要を指標 $j \in \{1, \dots, n\}$ によって表せば、 h 財を消費して得られる必要満足は、 $s_h(x_h) = \sum_j s_{hj}(x_{hj})$ によって表される。 $s_{hj}(x_{hj})$ は h 財を必要 j を満たすために x_{hj} だけ消費したときに得られる満足を表している。また、個人の総必要満足関数は $s(x) = \sum_h s_h(x_h) = \sum_h \sum_j s_{hj}(x_{hj})$ となる。

3-2 追加的必要満足遞減の法則

経済活動をする個人の目的は、必要満足を最大にするためにかれが利用できる財をそれぞれの必要にどのように振りむけるかを決定することであり、財の個人的価値はこうした個人の必要満足最大化行動の結果決定される財の評価である。この個人の行動が有意味であるためにはかれの必要満足関数が適当な性質を満足していなければならない。Menger はまず、 h 財を同一の必要を満たすために当てた場合には、その必要を満たして得られる満足は h 財の消費量が増加するのに応じて遞減する ([22], pp. 88-92), という法則から出発している。すなわち、任意の j について、同一の必要 j の追加的消費単位 c_{hj} から得られる追加的必要満足 $s_{hj}(x_{hj} + c_{hj}) - s_{hj}(x_{hj})$ は消費量 x_{hj} の減少関数である。

ところが、それぞれの必要から得られる満足は異なるから、同一の財を同じ量消費しても、それをどの必要を満たすために消費するかによって得られる満足は異なる。それでは、ある財を消費して得られる満足を最大にするためには、その財を異なる必要にどのように振りむけたらよいである

注 (6) Menger は、個人にとって財の資源は所与であると考えている。たとえば、かれは「任意の時点において、ある社会のさまざまな構成要因に利用可能な財の量は既存の環境によって決められている ([22], p. 46)」と述べている。

うか。この問題に対して Menger は次のように解答している。

「われわれがみてきたように、人々の努力はかれらの必要を完全に満足させるか、それができないとしてもできるだけ完全にかれらの必要を満足させることにむけられる。いま、財の量がいろいろな必要に対していて、それらの必要に対する人々の満足が異なる重要性をもっているとするれば、かれらはまずはじめに、その満足がかれらにとって最も高い重要性をもつ必要を満足させるか、あるいはあらかじめそのための考慮をするであろう。かれらに余剰があれば、かれらはそれをはじめの必要満足の次に重要な必要を満足させるためにふりむけ、さらに残余があれば、その次に重要な必要の満足にふりむけるであろう ([22], pp. 97-98)。」

個人は必要満足を最大にするように行動するのであり、そのときにはこの原理が自動的に満たされるから、必要満足を最大化する個人が任意の h 財を c_h 消費して得られる追加的必要満足は、消費量 x_h が増加するのに応じて自動的に逡減するとみなすことができる。したがって、必要の指標 j は省略することができて、 h 財の追加的必要満足 $s_h(x_h+c_h)-s_h(x_h)$ は消費量 x_h の減少関数である⁽⁷⁾と考えることができる。このことは、微分を用いて表現すれば $d^2s_h/dx_h^2 < 0$ であり、Menger の必要満足関数が限界必要満足逡減の法則を満たすことを意味する。したがって、Menger の必要満足関数は、加法的で限界必要満足逡減の法則を満たすから、凹関数である。

3-3 個人的価値

個人は利用可能な財を必要満足を最大にするように消費する。したがって、Menger の個人的価値の理論は、個人経済 (X, S, s, ω) およびこの個人経済の均衡

(Ma) x^* は $\{x \in X | x \leq \omega\}$ のうえで $\sum_h s_h(x_h)$ を最大にする

を満足する消費 x^* および Lagrange 乗数として決定される潜在価値 v^* によって記述される。必要満足関数は凹関数であるから、内点均衡を考えれば (Ma) から、

すべての $h \in \{1, \dots, l\}$ について

$$(Ma) \quad v_h^* = ds_h(x_h^*)/dx_h$$

$$(Mb) \quad x_h^* = \omega_h$$

となる。したがって、それぞれの財の価値は資源をすべて消費したときの限界必要満足によって決定される。Menger は、財の価値が限界必要満足によって決定されることを次のように論証している。

「さてわれわれは、ある量の財を所有して経済活動をしている人にとって、この財の任意の

注 (7) ここで得られた必要満足関数は、現代の効用関数と同じであると考えられる。ただし、Menger は効用という言葉には現代の定義と異なる定義を与えている。

「効用とは、あるものが人々の必要を満足させるために役立つ可能性であり、(効用が認識されているとすれば) 財性質の一般的な前提条件である ([22], p. 84)。」

したがって Menger の効用は、財の稀少性に依存して変化することはないから、財の価値の測度にはならない。

部分量がどのような価値をもつかを問うことにする。価値の本質を考慮すれば、この問題は次のように正確に表される。すなわち、経済活動をする主体が財のその部分を自由に利用できないならば、すなわち総利用可能量のうちその部分をのぞいた量にしかかれの力が及ばなかったならば、どの必要満足が失われるか。これに対する解答は、先に述べた人々の経済の本質に関する説明から得られる。このような場合には、経済活動をする人ならだれでも、あまり重要でない必要は無視して、かれに残された量の財によってとにかくかれらのより重要な必要を満足させるであろう。したがって、今まで保証されていた必要満足のうち、かれにとって最も重要でない必要満足が失われることになるであろう。

したがって、すべての個々の場合において、経済活動をする人は自由に利用する1つの財の総量によって保証されるすべての必要満足のうち、かれにとって最小の重要性をもつものだけが、総利用可能量の一定の部分量の利用可能性に依存している。したがって、この人々にとってのその財の総利用可能量の任意の部分量の価値は、その財の総量によって保証され、等しい部分量によって達成されるさまざまな必要満足のうち、かれにとって最小の重要性をもつ満足のその重要性に等しい〔(22), pp. 98-99)。⁽⁸⁾」

3-4 Menger の個人的価値の理論の意義

Menger の貢献は、素朴な効用理論による価値の特徴づけを、資源制約に基づく必要満足最大化の問題の解として導出したことである。3-3 で示した Menger の均衡条件 (Ma) および (Mb) は、本質的に Galiani, Turgot, Condillac らによってすでに指摘されている。ただし、Galiani, Turgot, Condillac らは、価値を素朴な限界効用概念によって特徴づけているが、価値が限界効用に等しいという命題を個人の効用最大化の特徴づけとして明確には把握していなかった。ところが、素朴な効用理論の価値の特徴づけは Menger の均衡条件と同一であり、それらは Menger の個人的価値の理論から導出される。したがって、Menger の個人的価値理論は、素朴な効用理論を含んでいるから、素朴な効用理論の拡張である。⁽⁹⁾

Menger が、素朴な効用理論による価値の特徴づけを、資源制約に基づく必要満足最大化の問題

注 (8) Menger は、価値決定の問題と同時に、資源の制約のもとでのさまざまな必要の対する財の最適配分の問題を解いている。すなわち、すべての $h \in \{1, \dots, l\}$ について

(α) (x_{nj}^*) は $\{(x_{nj}) \in \text{pro } j_n X \mid \sum_j x_{nj} \leq \omega_n\}$ のうえで $\sum_j s_{nj}(x_{nj})$ を最大にする、すなわち

(α) (x_{nj}^*) は $\sum_j s_{nj}(x_{nj}) + v_n(\omega_n - \sum_j x_{nj})$ を最大にする。

この問題を解くことにより、限界必要満足均等の法則すなわち、すべての $h \in \{1, \dots, l\}$ について $ds_{n1}(x_{n1}^*)/dx_{n1} = \dots = ds_{nl}(x_{nl}^*)/dx_{nl}$ が得られる。

(9) 理論 A が理論 B の拡張であるとは、理論 A の概念が理論 B の概念をすべて含み、理論 B の定理がすべて理論 A の定理であることである (Shoenfield [30], p. 41)。したがって、理論 A は理論 B から得られる情報をすべて含んでいるから、理論 A は理論 B より優れている、あるいは理論 A は理論 B の発展であると考えられる。Menger の個人的価値の理論は、素朴な限界効用理論にそれと同値な理論を加えた理論であると考えられるから、素朴な限界効用理論の拡張である。Menger の拡張は、同一の問題に対して別の側面からそれを把握するための認識を与えている。

の解として特徴づけたことは、Menger の価値理論が単に素朴な効用理論の理論的な発展であるばかりでなく、経済活動をする人々の行動原理を把握するための認識方法を飛躍的に改善したことをも意味する。実際、財の価値が個人のあるいは社会の必要満足の最大化に対する財の評価であるという Menger の認識は、個人の経済活動にとどまらず経済全体の経済活動をも説明しうる原理として、Wieser の自然価値理論を生み出す基盤となったのである。

4 個人経済における限界効用理論

多数の個人と財からなる経済においては、価値理論は個人間の効用比較に関する規範的判断を含んでいる。個人経済においては、個人が1人しか存在しないから、価値理論は個人間の効用比較に関する規範的判断は含まない。しかし、これらの価値理論は共通の理論構造をもち、価格理論から区別することができる。すべての個人経済における限界効用理論は、何らかの制約条件のもとでの個人の効用最大化に基づく資源配分の理論として把握することができる。ある個人経済における限界効用理論の構造は、その個人がどのような制約条件のもとで効用を最大化するかによって決定される。ここでは、Galiani, Turgot および Condillac の素朴な効用理論と Menger の個人的価値の理論は、価格理論の構造ではなく価値理論の構造をもつことを示す。

4-1 個人経済における価値理論の構造

Galiani, Turgot および Condillac の素朴な効用理論と Menger の個人的価値の理論は価値理論の流れに属す。

まず、Galiani, Turgot および Condillac の素朴な効用理論と Menger の個人的価値の理論は同一の理論の流れに属すことを示す。Menger の個人的価値の理論を効用関数を用いて表現すれば、個人経済 (X, u, ω) およびこの個人経済の均衡

(M α) x^* は $\{x \in X | x \leq \omega\}$ のうえで $\sum_h u_h(x_h)$ を最大にする

を満足する消費および Lagrange 乗数として決定される潜在価値 (x^*, v^*) によって記述される。

また、Galiani, Turgot および Condillac の素朴な効用理論は、一般的に次のように表現される([川俣17])。すなわち、すべての $h \in \{1, \dots, l\}$ について

(NUT α) $v_h^* \geq du_h(x_h^*)/dx_h$, $((du_h(x_h^*)/dx_h) - v_h^*)x_h^* = 0$, $x_h^* \geq 0$

注 (10) 限界革命の意義が何であるかについてはしばしば議論されるが (Black et al. [2]), それは少なくとも限界革命において限界概念が登場したからでないことは明らかである。その反例は Schumpeter [29] の随所に見いだされる。むしろ、限界概念自体は以前から用いられていたのであるが、それが最大化問題の特徴づけとして認識され、最大化問題が経済学における問題の核心であることが認識されるに及んで、経済問題を解くうえでの限界分析の威力が再認識されたことに限界革命の意義があるのではないと思われる。実際、限界という用語は、それを用いて表現される条件が最大化問題の特徴づけとしての必要条件であることを意味するもので、最大化問題による認識があってはじめて意味をもつ用語である。

(NUT β) $x_n^* \leq \omega_n, v_n^*(\omega_n - x_n^*) = 0, v_n^* \geq 0$.

Menger の個人的価値の理論は Galiani, Turgot および Condillac の素朴な効用理論と同値である。実際、Kuhn=Tucker の同値定理 (Berge[1], p. 242) から (M α) は (NUT α) および (NUT β) と同値である。したがって、Galiani, Turgot および Condillac の素朴な効用理論と Menger の個人的価値の理論は同一の理論構造をもつから、同一の理論の流れに属す。

次に、Menger の個人的価値の理論は価値理論の流れに属すことを示す。価値は一般に、 m 人の個人 $i \in \{1, \dots, m\}$ からなる分配経済 $((X_i, u_i), \omega)$ における資源制約 $\sum_i x_i \leq \omega$ のもとでの社会的厚生関数 $W(u_1(x_1), \dots, u_m(x_m))$ の最大化によって決定される (Lange[18])。したがって、価値理論は分配経済 $((X_i, u_i), \omega)$ およびこの分配経済の均衡

(WM) (x_i^*) は $\{(x_i) | x_i \in X_i, \sum_i x_i \leq \omega\}$ のうえで $W(u_1(x_1), \dots, u_m(x_m))$ を最大化するを満足する消費および Lagrange 乗数としての価値 $((x_i^*), v^*)$ によって記述される。

この理論を個人経済 (X, u, ω) に還元すると、社会的厚生関数は個人の効用関数そのものになるから、個人的価値の理論は個人経済 (X, u, ω) およびこの個人経済の均衡

(UM) x^* は $\{x \in X | x \leq \omega\}$ のうえで $u(x)$ を最大化するを満足する消費および Lagrange 乗数としての価値 (x^*, v^*) によって記述される。

逆に、個人的価値の理論における効用関数がある社会の社会的厚生関数とみなし、個人的価値の理論を社会的価値の理論とみなすこともできる。ただし、このときには、社会的厚生関数が個人の効用関数からどのようにして構成されるかについて規範的判断が必要となる。このように、価値理論は資源制約のもとでの社会的厚生関数あるいは効用関数の最大化に基づいて財の評価を決定する理論であり、その数学的構造は分離定理によって表現される (Negishi[23])。明らかに、Menger の個人的価値の理論は価値理論と同一の構造をもつから、価値理論の流れに属す。

4-2 個人経済における価格理論の構造

価格とは 2 人以上の個人からなる交換経済において財の交換比率として定義される概念であるから、個人経済の枠組みにおいては価格理論は存在しえない。価格理論における個人の理論は消費者の理論であり、それは価値決定の理論ではなく需要関数導出の理論である。したがって、価値決定の理論であり、需要関数導出の理論ではない Menger の個人的価値の理論は価格理論ではない。

交換経済における価値理論は、私有経済 $((X_i, u_i, \omega_i))$ およびこの私有経済の均衡

(PT α) x_i^* は $\{x_i \in X_i | p^* \cdot x_i \leq p^* \cdot \omega_i\}$ のうえで $\sum_n u_{in}(x_{in})$ を最大にする

(PT β) $\sum_i x_i^* = \sum_i \omega_i$

を満足する消費 x_i^* および価格体系 $p^* \in R^l$ によって記述される。

消費者の理論は、個人経済 (X_i, u_i, p) およびこの個人経済の均衡

(CT α) x_i^* は $\{x_i \in X_i | p \cdot x_i \leq p \cdot \omega_i\}$ のうえで $\sum_n u_{in}(x_{in})$ を最大にする

を満足する価格の関数としての消費 $x_i(p)$ によって記述される。消費者の理論においては価格は所

与であり、価格は交換の一般均衡において決定される。(CT α) から、

$$\{du_{ih}(x_{ih})/dx_{ih}\}/p_i = \dots = \{du_{ii}(x_{ii})/dx_{ii}\}/p_i$$

となり、すべての $h \in \{1, \dots, l\}$ について、 h 財の需要関数は価格 p の関数 $x_{ih}(p)$ として得られる。

このように所得制約のもとでの効用最大化として定式化された消費者の理論は、Walras [39] によって初めて定式化された理論で Walras 以前には存在しない。Walras 以前の消費者理論は、限界効用関数に基づいて表現され、限界効用関数を需要関数と同一視する理論であった。

4-3 素朴な効用理論における価値理論と価格理論

Schumpeter ([29], p. 302) によれば、限界革命以前にも、F. Galiani, F. Quesnay, C. Beccaria, A. R. J. Turgot, P. Verri, É. B. de Condillac, J. B. Say らの価値理論あるいは価格理論から構成される素朴な効用理論の流れが存在した。これらの素朴な効用理論の流れも価値理論の流れと価格理論の流れに区別される。

ところで、素朴な効用理論は制約条件のもとでの個人の効用最大化の理論として表現されていないから、ある素朴な効用理論が価値理論に属するか価格理論に属するかをその理論に基づいている制約条件によって区別することはできない。しかし、素朴な効用理論については、限界効用関数についての見解によって価値理論に属するか価格理論に属するかを判定することができる。根岸 ([24], p. 129) の指摘に従えば、素朴な効用理論においては、価値理論の特徴は限界効用関数を財の評価関数とみなすことにあり、価格理論の特徴は限界効用関数を需要関数とみなすことにあると考えることができる。

素朴な効用理論においては、個人は限界効用関数 (du_h/dx_h) によって特徴づけられる。Galiani, Turgot および Condillac の価値理論について指摘したように、素朴な価値理論は、個人経済 ($(du_h/dx_h, \omega)$) およびこの個人経済の均衡

$$(NVT \alpha) \text{ すべての } h \in \{1, \dots, l\} \text{ について, } v_h^* = du_h(\omega)/dx_h$$

を満足する価値 (v_h^*) によって記述される。これは、個人がそれぞれの財を、その財の資源の量を消費したときの限界効用に応じて評価することを意味している。したがって、限界効用関数は財の価値の評価関数である。

他方、素朴な価格理論は、個人経済 ($(du_h/dx_h, p)$) およびこの個人経済の均衡

$$(NPT \alpha) \text{ すべての } h \in \{1, \dots, l\} \text{ について, } x_h^* = du_h^{-1}(p_h)/dx_h$$

を満足する消費 (x_h^*) によって記述される。これは、個人がそれぞれの財をその限界効用が所与の価格に等しくなるように消費することを意味している。したがって、限界効用関数の逆関数は需要関数である。素朴な価格理論の流れがどのように構成されたかは本稿の範囲を逸脱するのでここではそれについて検討しないが、素朴な価格理論の流れに属す理論には Verri ([36], 第4節), Say ([27], 第1編, 第1章), Dupuit [7] らの理論がある。限界効用関数を需要関数とみなす理論は、Marshall ([21], 第3編, 第3章) によって所得制約のもとでの効用最大化の理論として定式化され、

所得の限界効用が一定であるという暗黙的仮定に基づいていることが指摘された。⁽¹¹⁾

このように、素朴な効用理論においては、価値理論も価格理論も限界効用関数に基づいて構成され、外生与件と内生変数のとり方が異なるだけである。価値理論と価格理論の相違は、限界効用関数を財の評価関数：消費→価値とみなすか、需要関数：価格→消費とみなすかである。評価関数と需要関数は相互に逆関数の関係にある。

4-4 他のタイプの個人経済における限界効用理論

個人経済における限界効用理論はすべて個人の効用最大化に基づく資源配分の理論として把握することができるが、個人経済における限界効用理論には価格理論および価値理論の他にも異なる構造をもつ理論が存在する。

この理論は形式的には、個人経済 (X, u, T) およびこの個人経済の均衡 $(*)$ (x_k^*) は $\{(x_k) \in X \mid \sum_k x_k \leq T\}$ のうえで $\sum_k u_k(x_k)$ を最大にするを満足する (x_k^*) によって記述される。 $(*)$ から、限界効用均等の法則すなわち、

$$\text{すべての } k \in \{1, \dots, l\} \text{ について } du_1(x_1^*)/dx_1 = \dots = du_l(x_l^*)/dx_l$$

が得られる。

この理論は、その枠組みが特定のであるために、1つの形式体系に対しいくつかの解釈が存在する。第1の解釈は、少なくとも Jevons ([15], pp. 59-61) および Menger ([22], pp. 95-114) によって指摘されている。⁽¹²⁾ この解釈は1つの財の資源をさまざまな用途に配分する問題である。 $\sum_k u_k(x_k)$ はある財を使用することによって得られるその財の総効用であり、 x_k はその財の用途 k への消費である。均衡条件は用途間の限界効用均等を意味する。Menger の個人的価値の理論がこの理論を含んでいるのを見ればわかるように、この解釈による理論は価値理論に統合される。

第2の解釈は、少なくとも Gossen ([9], 第1章) および Menger ([22], pp. 88-95) によって指摘されている。この解釈は制約条件 $\sum_k x_k \leq T$ を所得制約と考え所得制約のもとで効用を最大にする問題である。 x_k は k 財に支出する貨幣額であり、 T は所得額である。均衡条件は所得の限界効用均等を意味する。この解釈による理論は価格体系を明示的に導入することにより消費者理論に統合される。

第3の解釈は、Gossen ([9], 第2章) による解釈である。この解釈は制約条件 $\sum_k x_k \leq T$ を線形の生産技術と考え生産関数の制約のもとで効用を最大にする問題である。 x_k は労働1単位の投入によって生産される k 財の生産量であり T は労働投入量である。均衡条件は労働投入の限界効用均等を意味する。この解釈による理論は帰属理論であるから、価値理論に統合される(根岸[24])。

注(11) Say [28] はかれの先駆者として Verri [36] をあげ、Dupuit [7] は Say [27] の効用理論に基づいて限界効用理論を展開している。効用理論および消費者理論の展開については Stigler [32] を参照されたい。

(12) Menger は個人的価値の理論のなかでこの問題を解いている。本稿の注(8)を参照されたい。

このように、このタイプの理論はそれぞれの解釈にしたがって何らかの資源配分の問題を考察しているが、本質的には価値理論あるいは価格理論に包摂されると考えられる。

5 Wieser の自然価値理論

Austria 学派の経済学者は、個人経済における価値決定に関する考察を通して、経済全体における価値の概念に関して他の学派の経済学者より深い洞察をもっていた。このことについて Schumpeter は次のように指摘している。

「Austria 学派の経済学者は、経済行動のいくつかの根本的特性を説明することに、ロビンソン・クルーソー経済モデルを利用する慣習をもっていた。したがってかれらにとって、かれらの基本的概念である価値およびその派生概念である費用や帰属的報酬などは資本主義に特殊な概念ではない、ということに悟るのはとりわけ容易なことであった（〔29〕, pp. 986-987）。」

この言明は、個人的価値の理論も社会的価値の理論も本質的に同一の構造をもっていることを指摘している。すでに指摘したように、価値の理論は個人的価値と社会的価値とにかかわらず、分離定理によって表現される数学的構造をもっている。

Menger は、かれの『国民経済学原理』において個人経済における価値の理論を提示したにすぎないが、それが社会主義経済における価値の性質を特徴づけていることを示唆していた（〔22〕, pp. 51-60）。Wieser は、所得分配に関する規範的判断を導入することにより、Menger の個人経済における価値の理論を社会主義経済における価値の理論に発展させ、市場経済とは独立な価値の概念すなわち自然価値の概念を創出し、交換比率としての価格とは独立な財の評価として価値を定義した。Wieser は Menger の価値理論の特徴について次のように述べている。

「価値は社会主義的基盤のうえに組織された共同体におけるように交換が存在しないようなところでさえも一般に限界法則に従わなければならない。Jevons, Gossen および Walras はこのことを主張するには至らなかった。……Menger の価値理論はこの点においてそのライバルの理論とは本質的に異なる（〔40〕, p. 26, n. 1）。」

ただし、この主張はあくまでも Wieser による Menger の価値理論の解釈である。実際 Menger は、個人的価値の理論を社会的価値の理論に応用できることは示唆しているが、社会的価値の理論に必要な規範的判断については議論していない。Austria 学派の価値理論の根底には個人経済における価値決定の理論がある、という Schumpeter（〔22〕, pp. 986-987）の指摘を考慮すると、Wieser は Menger 個人経済における価値決定の理論を分配経済における価値決定の理論として拡張解釈したものと考えられる。確かに、それらの理論は数学的構造が同一で分離定理によって表現される

注 (13) Austria 学派の価値理論の特徴については Wieser [41] 自身の説明がある。

(14) 本稿で考察する Wieser による Menger の価値理論の解釈は、理論が一人歩きする例の典型である。Wieser の解釈が Menger の意図を反映する必然性はまったくない。

という共通の特徴をもっている。しかし、実際に、Menger の個人的価値の理論から Wieser の自然価値理論を構成するためには、分配経済を構成する各個人の効用関数から社会的厚生関数がどのようにして構成されるか、あるいはその分配経済における総需要関数がどのようにして導出されるかを示さなければならない。以下に示すように、まさにこの点こそ Wieser の貢献である。

5-1 Wieser の経済と自然価値の定義

Wieser によれば、交換が行なわれないような経済においても価値が決定されるのは人々になお欲求が存在し資源が稀少であるからである。

「経済事象が共産主義的原理のうえに秩序づけられている共同体や国家においても、財が価値をもたなくなることはない。欲求はなお他の経済において存在するのと同じように存在するであろうし、利用可能な手段はかれらの満足に対してなお不十分であろうし、人々の心はなおその所有物に傾倒するであろう。すべての自由財でない財は有用なだけでなく価値があると認識される ([40], p. 60)。」

Wieser は、自然価値を次のように定義している。

「われわれは、財の量と効用の間の社会的関係から生じる価値、あるいは共産主義国家において存在するであろう価値を自然価値と呼ぼう ([40], p. 60)。」

Wieser のいう共産主義経済あるいは社会主義経済とは、資源が私有化されずに共有財産として存在するような経済すなわち分配経済 (Malinvaud [20], pp. 107-110) であり、形式的には $((X_i, u_i), \omega)$ によって表現される。ただし、 i は分配経済を構成する m 人の個人の指標である。すなわち、 $i \in \{1, \dots, m\}$ である。また、 u_i は個人 i の効用関数であり、加法的で限界効用逡減の法則を満たしている。

5-2 自然価値決定の理論

Wieser は、自然価値の決定について次のように述べている。

「それら(すべての自由財でない財)は、需要およびそれと両立する利用可能な資産との関係にしたがって価値づけられる。そしてその関係は最終的に限界効用によって表現される。社会的供給および社会的需要、あるいは相互に社会的に比較される財の量と効用とが価値を決定する。基本的な評価の法則は、共同体に対して完全に有効であろう ([40], p. 60)。」

ここでは生産を考慮していないから、分配経済の定義によって社会的な財の量あるいは社会的供給は総資源そのものである。それでは、社会的需要あるいは社会的効用とは何を意味するのであるか。社会的効用とはおそらくわれわれの概念では社会的厚生関数を意味するものと思われるが、Wieser はそれが個人の効用関数からどのように構成されるのかについて何も述べていない。社会的需要はこの分配経済における総需要であるが、それを決定するためには分配経済における個人の所得分配を指定しなければならない。

Wieser は、自然価値を交換価値と比較して、自然価値を決定するための分配経済における所得分配の特徴について次のように述べている。

「自然価値は、完全に組織的で高度に合理的な共同体によって認識されるはずである価値である。……このような共同体は、もしわれわれが人間の不完全さの結果であるすべての問題や私的所有権がないと考えることができたならば、われわれの現行の経済に何が残るかを悟るために非常に役に立つであろう。ほとんどの理論研究者、とくに古典派の研究者は、暗黙に同じような抽象化をしてきたのである。とくに、価格が社会的価値判断となるという考え方は、購買力にあらわれたり価格を自然価値から分離したりするあらゆる個人間の格差を軽視することになる。こうして、大多数の理論研究者は、そうとは気づかずに、共産主義価値理論を著述してきたのであり、そうすることで現在の国家の価値理論を提示することを怠ってきたのである（〔40〕, p. 61）。」

「交換価値に対する自然価値の関係は明確である。自然価値は交換価値の形成における1つの要素である。しかし、それは単純にまた完全に交換価値に含まれるのではない。一方では、人々の不完全さ、誤り、詐欺、権力、偶然によって攪乱される。他方では、現在の社会の秩序、私的所有権の存在、富める者と貧しい者との間の格差によって攪乱される。その結果、後者の2番目の要素が交換価値すなわち購買力の形成に混合する。自然価値においては、財は単にその限界効用によって評価される。交換価値においては、財は限界効用および購買力の組合せに応じて評価される（〔40〕, pp. 61-62）⁽¹⁵⁾。」

これらの言明において自然価値と交換価値の相違について Wieser が指摘しているのは次の2点である。第1の相違は、自然価値は完全に組織化されている経済において定義されるが、実際に交換価値が成立する交換経済あるいは市場経済は完全には組織化されていないということである。しかし、交換価値を理論によって分析するときにはわれわれは完全に組織化された市場経済を想定するから、理論のレベルで自然価値と交換価値とを比較する場合にはこの論点は無視してもさしつかえないであろう⁽¹⁶⁾。

第2の相違は、自然価値は限界効用のみによって決定されるが、交換価値は限界効用と購買力の

注(15) さらに Wieser は、自然価値と交換価値の相違について次のように述べている。

「前者の場合(交換価値)には、後者の場合(自然価値)よりも贅沢品ははるかに低く評価され、必需品ははるかに高く評価される。交換価値はそれが完全な場合であっても、もしそう呼んでよいなら、自然価値のカリカチュアである。すなわち、交換価値は小さなものを拡大し、大きなものを縮小して自然価値の経済的対称性を混乱させる（〔40〕, p. 61）。」

この相違は、交換価値において存在する個人間の所得格差のために生ずるものである（根岸〔24〕, p. 136）。

(16) 現代の Austria 学派の流れを汲む研究者は、Austria 学派の理論の特徴をしばしば財の分割不可能性や不確実性の存在など市場メカニズムの作用に支障を来すような要因を指摘したことにあると考える（Hicks et al.〔12〕; Dolan〔6〕）。しかし、われわれの Austria 学派の特徴づけはこの立場と矛盾しない。というのは、われわれが指摘している Austria 学派の特徴は、それらの特徴がなかったとしたときの特徴であり、それらの特徴に付加される別の特徴であるからである。

組合せによって決定されるということである。このことは、自然価値の均衡においては個人の間には購買力の格差がない、すなわちすべての個人の所得が等しいことを意味している。これを文字どおりすべての個人の名目所得が等しいと解釈すれば、自然価値とはすべての個人に同じ所得を分配したときに分配経済の総需要と総供給の均衡において決定される価値である。

このようにして、Wieser の自然価値理論は分配経済 $((X_i, u_i), \omega)$ およびこの分配経済の均衡 $(W \alpha)$ すべての i について、 $M=(1/m)v^*\cdot\omega$ であり、

x_i^* は $\{x_i \in X_i | v^* \cdot x_i \leq M\}$ のうえで $\sum_h u_{ih}(x_{ih})$ を最大にする

(W β) $\sum_i x_i^* = \omega$

を満足する均衡配分および自然価値 $((x_i^*), v^*)$ によって記述される (Malinvaud [20], pp. 107-110)。均衡条件 (α) および (β) から、すべての $i \in \{1, \dots, m\}$ について、

$$v_h^*/v_k^* = \{du_{ih}(x_{ih}^*)/dx_{ih}\} / \{du_{ik}(x_{ik}^*)/dx_{ik}\}, \text{ ただし } h \neq k$$

が成立する。この分配経済の均衡すなわち評価均衡 (Debreu [5], p. 93) は、すべての個人について $v^* \cdot (\omega_i - x_i^*) = 0$ となるように資源の私的所有権を決定した私有経済 $((X_i, u_i), (\omega_i))$ における完全競争均衡である (Debreu [5], pp. 93-94)。したがって、すべての個人の所得が等しければ、自然価値と交換価値は一致する。

5-3 社会的厚生関数に基づく自然価値の特徴づけ

Wieser の自然価値理論は、分配経済における社会的厚生関数の最大化問題として表現することができる。

いま、社会的厚生関数を $\sum_i \alpha_i u_i(x_i)$ 、ただし $(\alpha_i) \in R_+^l$ によって表すことにする。このときには、Negishi [23] が示しているように、所得配分が (M_i) のときの完全競争市場の一般均衡は、 α_i が個人 i の所得の限界効用の逆数 $1/\lambda_i(p^*, M_i^*)$ に等しいような社会的厚生関数

(CSWF) $\sum_i 1/\lambda_i(p^*, M_i^*) \cdot u_i(x_i)$

の最大化によって決定される配分および Lagrange 乗数として決定される潜在価値の組み合わせ $((x_i^*), p^*)$ である。潜在価値 p^* は次のように決定される。すなわち、

(EV) $(p_h^*) = 1/\lambda_i(p^*, M_i^*) \cdot (du_{ih}(x_{ih}^*)/dx_{ih})$ 。

ところで、自然価値はすべての個人の所得すなわち自然価値で評価した資源の価値が等しくなるように資源の私的所有権が決められた私有経済の完全競争均衡において決定される均衡価格である。

したがって、Wieser の自然価値理論は、社会的厚生関数

(NSWF) $\sum_i 1/\lambda_i(v^*, M_i^*) \cdot u_i(x_i)$ 、ただし $M = v^* \cdot \omega/m$

注 (17) 所得の限界効用とは、次のような消費者均衡の問題すなわち

$$x_i^* \text{ は } \{x_i \in X_i | p^* \cdot x_i \leq M_i^*\} \text{ のうえで } u_i(x_i) \text{ を最大にする}$$

あるいは、

$$x_i^* \text{ は } u_i(x_i) + \lambda_i \cdot (M_i^* - p^* \cdot x_i) \text{ を最大にする}$$

において、均衡で決定される Lagrange 乗数 $\lambda_i(p^*, M_i^*)$ である (Negishi [23])。

を最大にするような分配経済の均衡によって記述される。自然価値は、

$$(NV) \quad (v_n^*) = 1/\lambda_i(v^*, M^*) \cdot (du_{in}(x_{in}^*)/dx_{in})$$

である。したがってわれわれの解釈においては、自然価値は文字どおり限界効用によって決定されるのではなく、限界効用は自然価値の相対比率しか決定しない。この意味において、われわれは Wieser の「自然価値においては、財は単にその限界効用によって評価される」という言明を拡大解釈している。それに対し、次の根岸 [24] の解釈は Wieser の cardinalist としての立場を忠実に反映している。

5-4 功利主義社会的厚生関数に基づく自然価値理論の特徴づけ

根岸 [19] が示しているように、Wieser の自然価値理論は限界効用を層別化しない社会的厚生関数

$$(USWF) \quad W(u_1(x_1), \dots, u_m(x_m)) = \sum_i u_i(x_i)$$

すなわち功利主義社会的厚生関数の最大化問題として定式化される。このときの自然価値は文字どおり層別化されない限界効用によって決定される。すなわち、

$$(UNV) \quad (v_n^*) = (\partial u_i(x_i^*)/\partial x_{in})。$$

したがって、「財は単にその限界効用によって評価される」ということができる。

他方、この解釈は個人の間で購入力あるいは所得の格差がないという Wieser の言明を効用のタームで各個人の所得の限界効用が等しいと解釈している。実際、自然価値の均衡が私有経済の完全競争均衡によって達成されるためには、社会的厚生関数 (CSWF) が

$$1/\lambda(p^*, M_i^*) \cdot \sum_i u_i(x_i)$$

によって表され、すべての個人の所得の限界効用が等しくならなければならない。そのときには、交換価値 (EV) は自然価値 (UNV) に等しくなり

$$(p_n^*) = 1/\lambda(p^*, M_i^*) \cdot (\partial u_{in}(x_i^*)/\partial x_{in})$$

となる。したがって、各個人の所得の限界効用が等しいならば、自然価値と交換価値とは一致する。とくに、「個人の所得と欲求とがすべて等しい場合に自然価値と交換価値とが一致する……しかし他の場合には自然価値と交換価値とは一般に異なる (根岸 [24], p. 136)。」このように、功利主義社会的厚生関数に基づく解釈は、自然価値の均衡においては個人の間所得格差がないという Wieser の言明を拡大解釈することになる。

こうして、自然価値の均衡においては個人の間所得格差がないという言明を文字どおり解釈すると、「自然価値においては、財は単にその限界効用によって評価される」という言明を拡大解釈することになり、逆に、後者の言明を文字どおり解釈すると前者の言明を拡大解釈することになる。これは、Wieser 自身の記述の曖昧さに起因しているものと思われる。そこで、5-3 と 5-4 のどちらの解釈も Wieser の自然価値理論の解釈として許容されると考えてよいであろう。また、各個人の効用および所得が等しければ、両者の解釈は一致する。しかし一般には、各個人の名目所得が等

しくても個人の間で所得の限界効用が等しいとは限らない。逆に、各個人の所得の限界効用が等しくても個人の間で名目所得が等しいとは限らない。したがって、これらの解釈は一般的にはそれぞれ独立な関係にあり、それらの相違は微妙である。

5-5 自然価値理論の意義

Wieser の自然価値理論が上にあげた 2 つの解釈のうちいずれによって特徴づけられるとしても、Wieser は自然価値を社会的厚生を最大化に基づく財の評価として定義している、という認識は同一である。Wieser の自然価値理論は、この意味で歴史的に重要であり、したがって次のような意義をもつ。まず、Wieser は 2 人以上の個人からなる分配経済において社会的厚生関数の最大化に基づいて決定される財の評価として価値を定義していることである。それによって、従来から指摘されていた価値概念と価格概念との相違が明確にされ、同時に価値理論の流れが形成されている。Menger の個人的価値の理論は Wieser の自然価値理論を個人経済に還元した理論であるから、Wieser の自然価値理論は Menger の個人的価値の理論したがって素朴な効用理論の拡張である。

また、かれ以前の功利主義社会的厚生関数に対して所得分配の公平さに関する価値判断を加えることによって、最適配分の評価について適切な基準を提示したことである。こうして、Wieser 自身は基数的効用概念に基づいていたが、社会的配分の決定においては各個人の名目所得が等しいあるいは各個人の所得の限界効用が等しいという個人間の効用比較の基準を提供し、その意味において単純な功利主義から前進したと評価することができるであろう。各個人の名目所得が等しいという基準は価値の形成に各個人の選好を忠実に反映するという意味においてより ordinalist の立場に近い考え方であり、各個人の所得の限界効用が等しいという基準は価値の形成に各個人の基数的効用を忠実に反映させるという意味において cardinalist の立場からは自然な考え方である。なお Wieser の厚生基準とかれ以後の厚生基準の関連については根岸〔24〕の議論がある。

6 結びにかえて

Galiani, Turgot, Condillac, Menger および Wieser の価値理論の構造を検討することにより、限界効用理論の歴史には、従来研究されてきた完全競争市場の一般均衡理論の流れとは別に、市場経済とは独立な財の評価としての価値の理論の流れが存在することが明らかになった。このことに基づいて、限界効用理論の歴史の研究について次の 2 点を示唆することができるであろう。

第 1 の示唆は、限界効用理論の歴史は価値理論の歴史と価格理論の歴史とに区別されるということである。価値理論および価格理論は、それぞれ理論構造に関して次のような特徴もっている。価値理論は、個人経済における効用関数の最大化あるいは分配経済における社会的厚生関数の最大化に基づいて決定される財の評価の理論であり、その数学的構造は分離定理である (Negishi [23])。価格理論は市場経済において完全競争市場均衡において決定される財の交換比率の理論であり、そ

の数学的構造は不動点定理と同値である (Uzawa [35])。価格理論は、限界効用理論を消費者理論のなかに吸収しているが、その枠組みは限界効用理論とは独立である。交換比率としての価格が財の需要と供給によって決定されるという考え方は限界効用理論に先行する (Schumpeter[29], pp. 97-98; 川俣[17])。限界効用理論は財の需要関数を導出するために価格理論に応用されたが、財の需要や供給という概念は、他の概念によって説明されなくとも価格理論を構成しうる。実際 Cassel [3] は、需要関数および供給関数から出発して一般均衡理論を構成している。完全競争市場の一般均衡理論の核心である Gale=Nikaido の補助定理 (Debreu [5], 5.6, (1)) は、需要関数や供給関数が他の概念によって説明されない基本的概念であったとしても意味のある定理である。

このような考え方は同時に、Jaffé [14] が意図していたように、さまざまな学派の理論構造を特徴づけることによって学派という概念を意味づけることに役立つであろう。本稿で得られた帰結は、Kauder ([16], 第6章, 第8章) や根岸 [24] が指摘しているような Lausanne 学派と Austria 学派の対比について、Lausanne 学派を価格理論の流れを形成する学派として、また Austria 学派を価値理論の流れを形成する学派として特徴づける考え方を理論構造および理論の流れの側面から裏づけている。さらに、Jaffé [14] が示唆しているように、Jevons [15] の理論を特徴づけることにより限界革命において重要な役割を果たした各学派の特徴をより明確にすることができるであろう。

もちろん、これらの特徴はこれらの学派だけの特徴ではない。たとえば、価値理論の流れについては、Lloyd [19] の理論や Gossen [9] の理論は Austria 学派の理論ではないが価値理論の流れに属する。また、限界効用理論は価値理論あるいは価格理論のどちらかに属すると考えられるから、Jevons の理論は Lausanne 学派あるいは Austria 学派のいずれかの学派の理論に類似したものになるであろう。一般に、同一の経済学者や同一の学派が異なる理論構造をもつ複数の理論を展開すること、あるいは異なる経済学者や学派が同一の理論の展開に貢献することはよくあることであり、まったく制約的な前提を設けずに学派間の特徴づけをすることは不可能である。したがって、われわれは Austria 学派の経済学者は価値理論だけを展開した、あるいは価値理論は Austria 学派のみによって展開されたと主張しているのではないことに注意されたい。

第2の示唆は、厚生経済学の基本定理は、適切な私有経済の完全競争均衡は最適配分であると表現することができるが、他方完全競争市場価格は価値に一致すると表現することもできるということである。前者のように表現される厚生経済学の基本定理は、経済状態の最適性が価値概念から独立に定義されていることに意義がある。このように価値概念が市場価格という観察可能な概念によって置き換えられ、最適概念が価値概念から独立に定義されるようになった背景には、19世紀後半以後の実証主義の台頭があると考えられる。その歴史的経緯については研究の意義と余地がある。

後者のように表現される厚生経済学の基本定理は、本稿で示したような価値概念の認識が保持されていた時代において、価値と価格の関係について述べている研究に見いだされるであろう。Condillac ([4], pp. 30-31, 本稿, 注(1)) の言明にみられるように、古典的な厚生経済学の基本定理は価値概念と価格概念の同値性を一般に主張してきたのであり、Pareto [25] 以前の厚生経済学の歴

史はこうした観点から研究することにより新しい光を当てることができるであろう。

参考文献

- [1] Berge, Claude, *Espaces topologiques, fonctions multivoques*, 2nd ed. (Paris: Dunod, 1966).
- [2] Black, R. D. C., A. W. Coats, and C. D. W. Goodwin, eds., *The Marginal Revolution in Economics* (Durham: Duke University Press, 1973).
- [3] Cassel, Gustav, *The Theory of Social Economy*, trans. S. L. Barron (New York: Harcourt, Brace & Company, 1932); Translated from *Theoretische Sozialökonomie*, 5th ed. (Leipzig, 1932); Reprints of Economic Classics (New York: Augustus M. Kelley, 1967).
- [4] Condillac, Étienne B. de, *Le commerce et le gouvernement*, in *Œuvres complètes de Condillac*, Vol. IV (Paris: Houel, 1798).
- [5] Debreu, Gerard, *Theory of Value*, (New York: Wiley, 1959).
- [6] Dolan, Edwin G., ed., *The Foundations of Modern Austrian Economics* (Kansas City: Sheed & Ward, 1976).
- [7] Dupuit, Jules, "On the Measurement of the Utility of Public Works," *International Economic Papers*, No. 2 (1952), pp. 83-110; Translated from "De la Mesure de l'utilité des travaux publics," *Annals des Ponts et Chaussées*, 2me série, 8 (1844), 332-375.
- [8] Galiani, Ferdinando, *Della Moneta* (Napoli, 1751); 2nd ed. (Napoli, 1780); Reprinted in *Scrittori Classici Italiani di Economia Politica*, 50 Tomi, ed. P. Custodi (Milano: Destefanis, 1803-1816), Parte Moderna, Tomo III.
- [9] Gossen, Hermann H., *The Laws of Relations, and the Rules of Human Action Derived Therefrom*, trans. R. C. Blitz with an introduction by N. Georgescu-Roegen (Massachusetts: MIT Press, 1983); Translated from *Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus flissenden Regeln für menschliches Handeln* (Braunschweig: Friedrich Vieweg & Sohn, 1854).
- [10] Graziani, Augusto, *Storia Critica della Teoria del Valore in Italia* (Milano: Hoepli, 1889).
- [11] Groenewegen, P. D., "A Reappraisal of Turgot's Theory of Value, Exchange, and Price Determination," *History of Political Economy*, 2 (1970), 177-196.
- [12] Hicks, J. R. and W. Weber, eds., *Carl Menger and the Austrian School of Economics* (Oxford: Clarendon Press, 1973).
- [13] Jaffé, William, "Léon Walras's Role in the "Marginal Revolution" of the 1870s," in Black, Coats, and Goodwin [2], pp. 113-139.
- [14] ———, "Menger, Jevons and Walras De-Homonized," in *William Jaffé's Essays on Walras*, ed. D. A. Walker (Cambridge: Cambridge University Press, 1983).
- [15] Jevons, William S., *The Theory of Political Economy* (1871); 5th ed., ed. H. S. Jevons (London: Macmillan, 1957); Reprints of Economic Classics (New York: Augustus M. Kelley, 1965).
- [16] Kauder, Emil, *A History of Marginal Utility Theory* (Princeton: Princeton University Press, 1965).
- [17] 川俣雅弘, 「Ferdinando Galiani の稀少性価値理論の歴史的位罫について」, 『三田学会雑誌』, 81(1988), 第2号, 137-155.
- [18] Lange, Oscar, "The Foundations of Welfare Economics," *Econometrica*, 10 (1942), 215-228.
- [19] Lloyd, William F., *A Lecture on the Notion of Value as Distinguishable not only from Utility, but also from Value in Exchange*. Delivered before the University of Oxford in Michaelmas Term

1833. (Oxford, 1834); Reprinted with an introduction by R. Harrod in *Economic History* (A Supplement to the *Economic Journal*), 1 (1927), pp. 168-183.
- [20] Malinvaud, Edmond, *Léçon de théorie microéconomique* (Paris: Dunod, 1977).
- [21] Marshall, Alfred, *Principles of Economics* (1980); 8th ed. (London: Macmillan, 1920).
- [22] Menger, Carl, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* (Wien: Braumüller, 1871); Reprint, *Carl Menger • Gesammelte Werke*, Band I, ed. F. A. Hayek (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1968): Translated as *Principles of Economics* trans. and ed. J. Dingwall and B. F. Hoselitz with an introduction by F. A. Hayek (Glencoe: Free Press, 1950).
- [23] Negishi, Takashi, "Welfare Economics and Existence of an Equilibrium for a Competitive Economy," *Metroeconomica*, 14 (1960), 92-97.
- [24] 根岸隆, 「一般均衡理論と厚生経済学におけるオーストリアの伝統」, 『古典派経済学と近代経済学』 (東京: 岩波書店, 1981), 第9章。
- [25] Pareto, Vilfredo, *Manuel d'économie politique* (Paris, 1909); Reprint, (Genève: Librairie Droz, 1966).
- [26] Samuelson, P. A., "Frank Knight's Theorem in Linear Programming," *Zeitschrift für Nationalökonomie*, 18 (1958), 310-317.
- [27] Say, Jean Baptiste, *Traité d'économie politique* (1804): 2nd ed. (Paris: Antoine Augustin Renouard, 1814).
- [28] ———, "Histoire abrégée des progrès de l'économie politique," in his *Cours complet d'économie politique* (Bruxelles: H. Dumont, 1832), Tome quatrième, pp. 262-305.
- [29] Schumpeter, Joseph, A., *History of Economic Analysis* (New York: Oxford University Press, 1954).
- [30] Shoenfield, Joseph R., *Mathematical Logic* (California: Addison-Wesley, 1967).
- [31] Stigler, George J., *Production and Distribution Theories* (New York: Macmillan, 1940).
- [32] ———, "The Development of Utility Theory," *Journal of Political Economy*, 63 (1950), 307-327, 373-396; Reprinted in his *Essays in the History of Economics* (Chicago: University of Chicago Press, 1965), pp. 66-155.
- [33] Turgot, A. R. J., "Valeurs et Monnaies," (circa 1769) in *Œuvres de Turgot*, Vol. III, ed., G. Schelle (Paris: Alcan, 1919), pp. 79-98.
- [34] Uzawa, Horifumi, "A Note on the Menger-Wieser Theory of Imputation," *Zeitschrift für Nationalökonomie*, 18 (1958), 318-334.
- [35] ———, "Walras's Existence Theorem and Brouwer's Fixed Point Theorem," *Economic Studies Quarterly*, 13 (1962), 59-62.
- [36] Verri, Pietro, *Meditazioni sull'Economia Politica*. (Milano, 1771); Reprinted in *Scrittori Classici Italiani di Economia Politica*, 50 Tomi, ed. P. Custodi (Milano: Destefanis, 1803-1816), Parte Moderna, Tomo XV.
- [37] Walras, August, *De la nature de la richesse et de l'origine de la valeur* (Paris: Johanneau, 1831); Reprint, ed. G. Leduc (Paris: Alcan, 1938).
- [38] ———, *Mémoire sur l'origine de la valeur d'échange* (1849); Reprinted in A. Walras [37], pp. 316-343.
- [39] Walras, Léon *Éléments d'économie politique pure* (Lausanne: Corbaz, 1874-1877); definitive ed. (1926); Reprint (Paris: R. Pichon et R. Durand-Auzias, 1952).
- [40] Wieser, Friedrich von, *Natural Value*, trans. C. A. Malloch (London: Macmillan, 1893);

Translated from *Der natürliche Werth* (Wien, 1889) ; Reprints of Economic Classics (New York: Augustus M. Kelley, 1971).

[41] ———, "The Austrian School and the Theory of Value," *Economic Journal*, 1 (1891), 108-121.

(法政大学社会学部専任講師)